

---

# ツンドラ + 惚れ薬 = 牛乳!?

天野 雀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツンドラ + 惚れ薬Ⅱ牛乳!?

### 【Nコード】

N4905E

### 【作者名】

天野 雀

### 【あらすじ】

道端で倒れてるおっさんを助けたら惚れ薬をくれた。てかいらねーよ、って藤原、それは牛乳じゃないよ勝手に飲むなよ!?!?.....  
...あれ?これ解除方法は???

0 ・これ作った奴前にでろ、あと仕事しろ（前書き）

某作者の高得点作品をリスペクトしすぎるあまり作ってみることに  
なった。タイトルに関しては何となく許可を得ました。  
とりあえずガチったら負けだと思ってる。

## 0・これ作った奴前にでろ、あと仕事しろ

「好き。うっん、大好きっ！」

そんなことを彼女は、瞳を潤ませながら僕へ言った。

頬を赤らめながら、いつも僕のことを罵倒していた唇からそんな甘い言葉が漏れた。

彼女は僕の高校のクラスメイトであり学校一の美少女と名高い藤原<sup>わら</sup>沙姫<sup>さき</sup>だった。

美人というよりも美少女という言葉の似合う可愛さと美しさの同居した女の子だ。

スポーツ少女でスラツとした外見をしており、髪の毛は肩をすぎることくらい長さで、それをポニーテールに結っている。身長は僕より少し小さいくらいで、恐らく160センチを少し越えるくらいだろう。そしてプロポーションは抜群で、体育館でいつも揺れる彼女のゴリっぱなものはいつも男子の注目の的だった。

その藤原が、ピンクのブラウスに肌色のミニスカートという私服姿で僕に迫っていた。

しかし、正直僕は藤原のことなどどうとも思っていなかった。強いていうなら怖い女子、といったところだ。僕にだって女の子の好みはある。みんなみたいに藤原が飛び抜けて可愛いから、という理由だけで付き合いたいとは思わない。僕はもっと大人しい女の子が好みなのだ。

ただ、僕の目の前にある期待に濡れた瞳を見ると、感じなくてもいい罪悪感に苛まれる。

僕は知っていたはずなのに。

ただど言い訳くらいさせてほしい。

断じてわざとではない。

ついでに言わせてもらえば、信じていなかったのだ。

道端で行き倒れていたおっさんがくれた惚れ薬が、本物だったなんて。

僕は熱っぽい視線を送ってくる藤原から目を離し、藤原の手にしている紙パックへ目をやった。

紙パックはどう見てもコンビニなどで普通に買える、200mlの細身のものだ。

パッケージも、見たことがないものであるが、きちんと印刷されている。新商品だと言われれば、思わず納得してしまうような出来栄えだった。

ただ、そのパッケージに印刷された言葉は、

『惚れ薬！ 牛乳味！？WWW』

W<sup>ワラ</sup>、じゃねーよ。

0 ・これ作った奴前にしろ、あと仕事しろ（後書き）

エロくない？

そんな馬鹿なことはありません。

## 1・ツインドラ女王とおっぱいとエロ本（前書き）

カテゴリに『らぶえっち』を作った人を俺は尊敬します。

だって『らぶえっち』だよ、『らぶえっち』。

なんかすごくない？　なんていうか、こう、コスモ的ななにかを感じるよねっ

しかし第一話にしてすでにキャラ崩壊が激しいですね、主に作者の。

## 1・ツンドラ女王とおっぱいとエロ本

時間は少しだけ巻き戻る。本当に少しだ。まあ、多分30分前後なんじゃないかと思う。

ともかく、僕は少し前に家を出た。夜食を求めて夜のコンビニへ行っただった。

全てはその帰り。夜食のおにぎりを手に入れた帰り道で起った。

コンビニの外に出るとそこには満天の星空が、なわけもなく、くすんだ夜空が広がっていた。

都会とはとても恥ずかしくて言えないが、それでも都道府県的には首都ってことになっているここいらは十時を過ぎても道はまだ街灯で明るかった。

未だに梅雨の到来を感じさせない六月の夜だった。湿気も少なく、時折吹く風が半袖から出た腕を心地よくなでていた。

僕はそろそろビーチサンダルの必要性を感じながら、そんな夜道を歩いていった。

そして、それを発見した。

一言で言うなら人間が倒れていた。

ぶっちゃけ、すごく関わりたくなかった。

倒れているのは僕の父さんくらいの年齢のおっさんだった。身なりは悪くなく、浮浪者というよりも研究者然としていた。

なぜ研究者か、というと白衣を着ているからだ。ただその白衣はすすけるだけならともかく、ピンクや緑や赤など、明らかに自然界にないようなおかしな液体が飛び散ったあとがあった。しかもそれらの色は絵の具では説明できないようなぬめり(・・・)といかてかり(・・・)といか、とにかくそんな感じの威圧感を放っていた。ぶっちゃけ、すごく関わりたくなかった。はい大事なことなので二回言いました。

しかし回りを見渡しても人はいない。いつもならなんだかんだ人通りのある時間帯であるにも関わらず、今日はなぜか誰もいない。なんだか神様に試されている気がした。僕はこれでも敬虔なクリスチャンなのだ。あれだろ、八百万の神とかそんな感じ？

.....

まあともかく、そんなわけで僕の周りには誰もおらず、僕の前にはおっさんが倒れていた。

今は夏前だし、ここは路地一本入ったところで車も（ほぼ）通らないので、ほっといても死ぬってことはない、と思いたい……。

「し、死ぬううう」

「うわあああ！」

「バタ」

この人、突然動き出したかと思ったらバタって自分で言って倒れたぞ！

こ、これはつまり、話しかけるってことだよなあ。

こういう時、自分の流され易さが恨めしくなる。

やれやれ。

僕はとりあえず、おっさんの後頭部の横にしゃがみ込んだ。

「あ、あの。大丈夫ですか？」

「坊主。オレが大丈夫に見えるのか？」

おっさんはうつぶせに倒れたまま、こちらを見向きもせず低い声で言った。

というかつつかかってきたよ。なんなんだよおい！

「い、いえ。見えないです」

僕はツツコミたいのを我慢して答えた。強気に喋る人間に反論をしてはいけない、というのは僕がこれまでの高校生活で学習した数少ないことである。

「坊主、メシを持つてるか？」

「はあ、ちょうどおにぎりを二つほど」

「坊主、でかしたぞ」

おっさんはそう言っていると、これまでぴくりともさせなかった体を跳ね起こした。そしてあれよあれよと言う間に僕からレジ袋を奪い、包装を解いて口へ突っ込んだ。

「ほがっ、ふえふえほのがっ!!」

「わ、分かったから。分かったから、口のもがなくなっただけから喋ってよっ」

僕がそう言っていると、おっさんは安心したようにガツガツと二つのおにぎりを片付けた。

「坊主、お茶」

「ねえよ!!」

「ただだけあつかましいんだ！」

「まあそうかつかするな。若いもんはこれだからいけねえ」

「……………」

僕は黙って携帯の110番を押した。触らぬ変人に祟りなし。

「おっと。その物騒なもんは預かるぜ」

手遅れでした！

僕の携帯は発信ボタンを押す寸前で奪われてしまった。

「なにするんですかっ！ 返してください！」

「実は追われてる身でね、警察はまずいわけよ」

「僕はもつとまずそうですね、それは」

「そうオレをリスペクトしたような目で見ろな。照れるだろう」

「目も頭も腐ってるみたいですね」

「ついでに性根も腐ってやがるともつぱら有名だ」

自覚はあるらしい。

自分が変人だと自覚していない変人と、自分は変人だと言い張る変人。僕はどっちがやっかいか少しの間判断に困った。

結論、どっちも僕の人生には関わって欲しくなかった。

「じゃ、そういうわけで」

僕はおっさんから携帯をひったくると、踵を返した。

「まあ待て、坊主。これもなにかの縁だ」

「僕は基本的に馴々しい人を信用しないことにしてるんです」

「なかなかクールだな。気に入ったぜ兄ちゃん」

「勝手に呼称を親しげにしないでください」

「まあ待て、兄ちゃん。今オレは最高に気分がいい。よってこれをやるっ」

「なんだって？」

おっさんはそう言うと、僕の手へなにかを押し込んだ。

目を落とすとそれは、200mlの紙パックだった。手に伝わる重さから、中身は開封されずに入っていることが分かる。

そしてそのパッケージには、

『惚れ薬！ 牛乳味！？WWW』

とあった。

「はあ？ あの……」

僕はおっさんに文句を言ってやるべく顔を上げたが、

「あ、あれっ!？」

「あんた、ひとりでなにやってるわけ？」

僕の前には誰もいなくなっていた。そして、後ろからは不機嫌そうな声色が届いた。まるで会いたくもない同級生に夜道であってしまっ、しかもそいつがおかしな行動をとっていたために逆に声をかけざるを得なくなってしまうた女の子のような声色だった。

僕はギチギチという音がたちそうな首を必死に捻り、後ろを向くのだった。

やはりというか、そこにいたのはクラスメイトにして校内最強の美少女、藤原沙姫だった。ついでに言うなら天敵、でもある。

それほど積極的に話したことがあるわけではないが、お互いがお互いのことをそれこそ空気によって『気に食わない奴だ!』と感じ取っていた。

その藤原が腰へ手をやり（まるでモデルのようだ）、僕の前へ立

ちはだかっていた。そのスカートから伸びた健康的な脚のラインは、ただそれだけで倒錯的ななにかを放っているようで、僕は思わず生唾を飲み込んだ。

「あんた、なにやってるのよ？」

藤原はその黄金律とも言えるような整った眉を、不機嫌そうにしかめて言った。美人というのはただ美人だというだけで人を服従させる。友達なんかは藤原のそういうのを鼻にかけないストイックなところがいい、と言っていたっけ。だけど、意識するしないに関わらず、やはり藤原の不機嫌な顔というのは僕を圧倒させた。

だからだろう。僕の口から出てきた言葉には、どこか言い訳染みだ響きがあった。

「い、今ここに变なおっさんがいなかったか!？」

「そんな奴居ないわよ。あたしが見たのはあんたがひとりでブツブツ言ってるそこだけ」

「そ、そんな……」

馬鹿な、という言葉は口から漏れることもなく、体の内側へ不純物となって堆積していくようだった。

「で？ 道の真ん中でなにやってるのよ。邪魔なんだけど」

「变なおっさんがいたって言ってるだろ。絡まれてたんだよ」

「ふーん。变なおじさんねえ」

藤原は全く信じていない顔で言った。

「ま、あんたのことなんてどうでもいいけど、うちの近所で变なことししないでよね」

「するか!」

「普段陰気な奴って、行き詰まった時に何するか分からないからね」

ストイック、ねえ。

僕はポニーテールを揺らしながら僕を嘲笑する藤原を睨み付けた。腹の立った僕は手にした紙パックを藤原へ投げ付けた。

が、

「なによ、これ」

さすが運動部というか、あっさりとかヤツチされてしまった。僕はあまりの情けなさに少しげんなりした。

「そのおっさんが僕によこしたんだよ」

「あっそ。あ、これ牛乳じゃない！」

藤原はパツケージを見て嬉しそうに言った。

「それ、返せよ」

「やーよ、あんたが投げたんじゃない」

僕は藤原を睨み付けたが、彼女は涼しい顔をしてそれを受け流した。

「投げたってことは、いらなのよね」

藤原のそんな言葉が聞こえたかと思うと、視線を上げた先で藤原はすでにストローでその紙パツクを吸い上げていた。

「ちようど牛乳が飲みたくなって買物に来たから助かつちゃったわー」

そんなことを飲みながら漏らした。

夜の十時すぎに牛乳が飲みたくなってわざわざ外まで買いに行くとかどんだけ牛乳が好きなんだよ……。

そんなどうでもいいところにさらにげんなりしつつ、僕のほうはそろそろ帰ることにした。

「おい、藤原。腹壊しても僕は責任取らないからな」

「……………」

「藤原？」

その時になつて、僕はようやく藤原の様子がおかしいことに気が付いた。

藤原はストローで紙パツクの中身を飲んでた。それは時折喉が動くことから間違いない。ただその飲み方が異常だった。なんだか一口のむごとにつつとりとしているのだ。瞳は色気たつぷりに濡れ、にも関わらず焦点はまったく合っていないかった。ゆっくりと、ひとくちひとくち味わうように飲んでいくくせに、時折息継ぎのために

ストローから離される口からはハアハアと悩ましげな吐息が漏れている。顔は徐々に赤みを増し、熟れたりんごのような赤さになっていた。

なにもできずにその様をぼうつと見ていた僕の前で、遂に藤原は紙パックを全て飲み終えてしまった。最後はジュースのなかなか飲めない子供のように、音がするくらい最後の一滴まで吸い上げていた。

そして、飲み終えてしまうと今度は自分の口の周りをぺろりと舐めた。それはまるで今まで飲んでいた飲み物の味が忘れられない、とでもいうような仕草に見えて、僕はその淫靡さに鳥肌が立った。

そして、焦点の戻った藤原が僕を見る目は完全に蕩けていた。

その上目遣い、ただそれだけに、全て逆立ったと思われた毛穴がさらにゾワリとした。

「好き。うっん、大好きっ！」

藤原が、聞いたこともないような甘えた声で僕へ愛の告白をした。僕はその事実にくらくらした。

ここまで来たるもはや信じるしかあるまい。『惚れ薬』というのは本当だったのだ。

だが、それが分かったところでやるべきことはひとつだ。僕は暴れる理性を深呼吸で押さえ付けた。落ち着け、これは藤原だ。OK俺、これは藤原だ。行動を開始する。

「おい藤原、落ち着け。お前のその気持ちは偽物だ。だってそうだろう？ 僕らはいつだって憎しみ合っていたはずだ。そんなお前が僕のことを好きになるわけがない。その気持ちは偽物だ」

少し早口になってしまった。なんで僕が藤原に告白されて動揺しなくちゃいけないんだ。

だが、

「うっん。今まではあたしが間違ってた。朽木は正しい。あたしがバカだっただけ。だけど、朽木が好きって気持ちは偽物なんかじゃないもん」

全く聞く耳を持たない。これは少し厄介かもしれない。

「いいか？ もう一度言っぞ、落ち着け。深呼吸だ」

「うん」

「吸って」

「すう」

「吐いて」

「はあ」

「落ち着いたか？」

「うんっ」

「冷静になつて自分の内面を考えるんだ。この好きって気持ちはどこか不自然じゃないか？」

「う、うーん……」

「つい十分前のお前は思ってたはずなんだ。不自然なはずだ」

「そう言われてみれば……そうかも」

「だろう？」

僕は少し光が見えてきた気がした。

「だから……」

「ううん。でもそれもどうでもいい！ 今、誰かに恋することを知ってこんなに幸せなんだもんっ。それが本物だろうが偽物だろうがどうでもいいもんっ」

「え？」

いや、いいわけがないだろう……。

「それに、今は朽木のことしか考えられないしっ」

藤原はそんなことを恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら、満面の笑顔で言った。

「ぐっ」

その笑顔に、僕は少しだけ氣勢を逸らされてしまっ。

「朽木はあたしのこと、嫌い？」

そして、畳み掛けるようにして藤原は、心細そうな、庇護欲をくすぐるような声で僕へ尋ねるのだった。

僕の方は藤原の甘過ぎる声や言葉、近寄ってくる香る女の子独特の柔らかい匂いに頭はぐるぐるだった。

「好きとか、き、ききき嫌いとかじゃなくてさー！」

「じゃあ好き？」

「あ、あの……うつつ……」

「じゃあ、好きになってもらうしかないね」

その時の藤原の声はどこか低く、僕のその時点でその淫靡さに気付くべきだったのだ。

「ほら、あたしの心臓の音、聞いて」

藤原はそう言う僕の手で自分の手を重ねて、自分の形の良いおっぱいを押しつぶすように押し付けた。

「あ、う……ちょっと……うつつ」

そうして聞こえるのは自分の心臓が早鐘を打つ音ばかりだった。

藤原の巨乳は張りがあり、服の上からでもその柔らかさを自己主張しているようだった。藤原のおっぱいは、まるでそれ自体が引力をもっているかのように、服越しであるにも関わらず僕の手を吸い付いた。形、なのだろうか。それは人の手に中にあるこそがあるべき姿とでもいうような自然さで、そこに収まっていた。といっても藤原の大きすぎるおっぱいは僕の手には少し余るのだが。

「好き。あん、朽木い、好きい」

そして耳元では呪い言まじなのように、甘い言葉を囁き続ける。そうしている、いつたいどっちが操られているのかさえも曖昧になってくるのだった。

片手だった手はいつの間にか両手になり、場所はすっかり心臓ではなく下乳を持ち上げるような位置にあった。両手の甲に添えられた藤原の手は汗でしっとり濡れていた。手のひらが感じる藤原のおっぱいは熱いと暖かいの中間のような温度だった。感触として感じるのはほとんど服の繊維だけだというのに、その視界から得られる扇情的な光景に僕の頭はどうにかなくなってしまいそうだった。しかも、女の子の胸というのは想像以上に柔らかいものだったらしく、

触れているだけで形が変わっていた。その感触が、なんとも言えず甘美だった。

「うふふ、男の子なら、こういうのが嫌いな人はいないって聞いたよ」

藤原は耳元でそう呟くと、重ねた手を上から強弱を付けて握り始める。そう、まるでものを揉んでいるように。ふにつ、ふにつ、と僕の手はこれまで必死に理性でもってブレーキかけていた領域に、突き落とされそうだった。もちろん、ブレーキをぶっ壊されてから。

「う、わわわ……！」

ガタツ。

「……………うわあああ！！！」

路地の奥の方から物音がした。見ればそこには黒猫が一匹、道路を横断していた。

「はあ、はあ、はあ」

「ハア、ハア、ハア」

僕と藤原の距離は物音に飛び退いたおかげで少し離れていた。僕はそこから一步でも近寄れば藤原のチャームの魔法にかかってしまうという脅迫観念から、一步も動けずにいた。

「だいたい、どうかしていたとしか思えない。」

いくら人通りの少ない道だからといって、公道のと真ん中でクラスメイトの胸を揉んでいたのだ。

「極度の緊張のためか、頭痛までした。」

見れば藤原は僕が夢から覚めてしまったのを、理解しているようだった。それ以上僕に迫ってくるというようなことはなかった。

しかしそれはつまり、『惚れ薬』の事実が勘違いではなかったことを示していた。

「きよ、今日はそろそろ帰るよ」

「そう言った僕の声は裏返っていた。」

「うん、じゃあまた学校で」

藤原は暗闇でも分かるほど、興奮した顔のまま言った。

その後のことはよく覚えていない。とりあえず、僕は逃げるように走って帰ってきたことだけは玄関で荒い息を整えていたことで理解した。

そして、そのさらに数分後、悩みの種は想像以上の花が咲きそうなことを予感した。

自分の部屋のベッドの上には置き手紙とともに、一冊の取扱い説明書が置かれていた。

置き手紙曰く、

『そう言えば、惚れ薬！ 牛乳味！？wwwの取説を渡して置くのを忘れていた。なので勝手に進入させていた。取説にはないが、かなり強力なので使いどころは自分の倫理観とも照らし合わせて嚴重に考えてくれたまえ。PS・エロ本を背表紙変えて堂々と本棚にならべるのは、あまり効果的ではないぞ、兄ちゃん』

余計なお世話だよっ！

1 ツンドラ女王とおっぱいとヒロ本（後書き）

あんまりニヤニヤしない？

ぶっっちゃけやらかしたと思ってる。

2・にわにわにわにわにわがにわる(前書き)

タイトルなんて飾りだ！

考えるんじゃない、感じるんだ！！

あとぶつちやけ俺も惚れ葉欲しいです。

## 2・にわにわにわにわにわがにわる

今さら感もただよいつつあるが、僕の名前は朽木くつきという。朽木くつき真志まじだ。

名前はシンジではなくシンシというところがミソ。名前の通りの紳士でもある。もちろん小、中は名前のせいではじめられた。両親まじ死ね。

そんな紳士であるところの僕の趣味は自転車でツーリングすることである。

今はお金がないが、いつかバイクを買い、やがては車も買おうと思う。

しかし今のところ僕の手元にある乗り物と言えばこの自転車だけである。そんなわけで僕は日曜日である今日、自分の趣味を満喫しているのである。

「噂には聞いていたけど地味な趣味ね」

そして、藤原はそんな僕が風の感触を肌で感じている時に現われた。

昨日のミニスカートとは違い、紺のジーパンとイラスト入りのラフなTシャツという出で立ちだ。トレードマークのポニーテールも健在で、なんだか彼女のかっこよさの際立つ格好だった。

そして、その顔を見たおかげで昨日の悪夢が戻ってきた。てか、わざと地元を外すルート通ってたのになぜここに！

しかもここは昨日とは違い、車道と歩道の分かれ、木が埋まった花壇があったり100円ショップがあったりする表通りだ。しかも真っ昼間だし。

僕は他人の振りを決め込んで、藤原の横を素通りすることにした。

「ちよ、ちよっと。待ちなさいよっ」  
が、

「うおおおおお！？」

なぜかブレーキをかけていないのに、タイヤが前に進まなかった。後ろを振り向くと、藤原が両手で自転車の荷台を掴まえていた。ガツデム。

俺は諦めて足を地面についた。

「で、なにをしてらしているのでしょうか？」

「なんで敬語なのよ」

藤原は不満そうにジト目で睨んでくる。のだが、なんだか藤原は微妙に視線を合わせようとだけはしない。顔もほんのり赤く、声にも気まずさが混じっているように、聞こえなくもない。まるで好きな女の子を自家発電の材料にしてしまった翌日の青少年のような態度だった。

とは言ったものの、つつ掛かるなあ、と僕は思わずにはいられない。ここらへんはやはりあくまでも『惚れ薬』なのであって、『洗脳薬』ではないことを実感させられる。つまり、元の人格が変わるわけではないのだ。

「んで？ なにしてんの？」

「そ、そんなのあなたには関係ないでしょっ！」

うおい！

さすがに関係あるだろう！

そう思ってから、僕は腕時計で今の時間を確認した。

十時半。

僕は惚れ薬の取扱説明書の内容を思い返した。たしか、この時間帯はレベル2だ。

というか、厄介すぎるだろあの惚れ薬……。

実はあの惚れ薬、効果は一律ではなく時間帯によって『惚れ度』が変わるのだという。理由は製作者の趣味、とのこと。次あつたらまじで殺してやろうと思っっている。昨夜、僕の殺人予定リストにあるおっさんが書き込まれた。ちなみに位置は両親の隣だ。

そうして現在の藤原の状態は十時から始まるレベル2。確か、「相手のことを好きなのかな？」と疑問に思う程度。相手を見てると

ドキドキしてくるらしい」だったはずだ。

昨夜の奇想天外な行動が確かレベル4だったはずなので、それに比べればだいぶ常識の範囲内と言えた。惚れ薬が常識的かどうかはともかくとして。

ともかく、今の藤原に僕のが好きだという確信はないわけだから当然、自分の胸を僕に揉ませる、なんてことにもならない。

……………。

「うわあああああ．．．cdjAbd???!?!?!」

「きゃ!?! 突然頭かきむしってどうしたのよ」

「僕は! 僕は! 僕はああ!?!」

ていうかなんでこいつ平然としてんだよ!

こいつの中では昨日のことはどう処理されてるんだ?

「う……………ぐ……………」

聞いてみたい気もするが、なんだか自らパンドラの箱を開けているような気もしたので辞めておいた。

「で、なんなんだよ。何かよう?」

「え?」

「え? じゃないよ。人が趣味満喫してるところをわざわざ呼び止めたんだから、なんか用事があったんじゃないの?」

「あ、いや、その……………」

藤原はそう言うこと焦ったようにもじもじした。

まあそうだろうなー、とは思ってたけどさ。

「用事があるわけじゃないんでしょう?」

「そ、そんなわけないじゃない!」

「じゃあなんだよ?」

「う、ぐ……………」

そう言うと、藤原は恥ずかしいと悔しいを足して二で掛けたような顔をして黙り込んだ。

僕はSなので、それを助け船も出さずに見守る。

そしてちょうどカップラーメンが出来上がるころ、

「あ、あんたがあたしをシカトするのが悪いんでしょ！」  
すっかりゆでダコのようになった藤原が言った。

……うん。

……なんていうか。

「これはこれで可愛い、かも」

「なっ!？」

その言葉に、藤原が顔を赤らめて口をあわあわせる。

「か、かわっ……でも! その! あの……でも……」

僕には藤原が今にも高血圧で倒れるんじゃないかと、少し心配になつてきた。

ただ、ちよつと楽しくなつてきてもいた。昨日は突然のことに慌ててしまったが、あれだけ僕にツンケンしていた藤原が、いまや僕の一言ひとことに過剰反応して七転八倒しているのだ。これが楽しくないわけがない。しかも、藤原はルックスだけはずば抜けているのだ。こうなつてしまえば可愛いものだった。

この時、僕は自らその泥沼に全身ダイブしていることに気付いていなかった。「君子危うきに近寄らず」を座右の銘としている朽木真志の、一生の不覚といつてもいいだろう。

ともかく、その時の僕は浮かれていた。それもそうだ。天敵だった誇り高き狼が、飼い犬のように腹を見せて媚びているのだ。浮かれるなというほうが無理な注文だ。

そんな僕だったからこそ、その時意味もなく凶悪なことが思い浮かんだのだった。

惚れ薬の最終段階、夜十一時から十二時にかけておこる末期症状。おっさんの説明書にはレベル5、とあった。

「ねえ、ところで藤原」

「え? え?」

まだ目を白黒させている藤原の耳元へ、僕はそつとささやいた。

「昨日の夜、ひとりでベッドの上でなにしてたんだ?」

僕は薬の効果から、確信めいて言った。あの説明書を全て信じる

ことはできなかったが、レベル4だという昨夜の藤原ですら、公道で自分の胸をクラスメイトに揉ませてしまうくらい大胆なことをしでかすのだ。説明では性格には全く干渉しない薬であるらしいが、その変わり恋愛感情に付随する性欲を強く刺激するらしい。それこそ、一時的にその人の倫理観さえも破壊してしまいかねないほど。

そしてこれは昨日恥をかかされた僕の報復でもある。惚れ薬のせいで妙な部分に羞恥心感じなくなっている藤原への、これは言わば『お仕置き』だった。

「え？」

しかし、僕のその言葉を聞いた藤原の声の質が変わった。同時に、ブチという音が聞こえた気がした。見れば、藤原は目尻に涙を溜めていた。

「あ、いや、その……」

正直、この時僕はやりすぎたことに気がついた。僕は、調子に乗って藤原を傷つけた。そう思った。

だが、

「えーそうよ、したわよー人エッチ。女の子だってするのよ。なんか文句あるわけ？」

「は……？」

開いた口が塞がらなかった。

なにを思ったのか、藤原はとにかく早口で喚きたてた。

「オカズはあんたよ。昨日も言ったでしょ、何でかしらないけどあたしはどうやらあんたのことが好きになっちゃったのよ。しょうがないじゃない。あたしがなんか悪いことしたっていうの？ いいえ、してないわ。ちょーっとエッチなことしただけで、あたし悪いことなんてなんにもしてないわ。あんたに責められることなんて、なにひとつないのよ！」

そんなことを、顔を真っ赤にしながらかまくし立てるのだった。

呆然とする僕を置いてけぼりにして、藤原は自分の言いたいことだけを言い終えると、

「フン」

パチーン！

「ぐふっ！？」

僕へ気持ちのいいピンタを一撃入れ、どこかへ去っていった。

僕が動けるようになったのは、それから何時間たってからなのか僕にはよく分からない。あるいは、それは数分のできごとだったのかも知れないけれど。

動き出した僕の右頬は、まだ熱を持っていた。

どうやら、感情の折り合いは分からないが記憶は引き継いでいるらしい。

そんなことを思いつつ、僕はとぼとぼと帰路へ着いた。

それから更に数時間たって、僕の心臓はまだ彼女の告白にドキドキし続けているのだった。



## お詫び文

えー、お詫び文です。

なんていうか、思いつきで「ツンデレ書こう！」と過去二度ほど思い立ち、二度ほど失敗いたしました。どうやらさつぱり更新しなくなっただけでも、覗いてくれている方がいるようなので、こうしてお詫び文を書かせていただいています。本当にすみません。両作品とも続きはあるにはあるのですが、ほぼ間違いなく……いえ、間違いなく完成いたしません。読んでくださった方、感想をくれた方、本当に申し訳ありませんでした。突然作品を削除するのはここまで読んでくださった方に失礼だと思いましたが、最低でもあと一ヶ月はこのまま晒しておこうと思います。これからは、公開した作品はを未完で削除する、なんてことにはならないよう、しっかりとしていこうと思います。本当に、申し訳ありませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4905e/>

---

ツンドラ + 惚れ薬 = 牛乳!?

2010年10月8日15時38分発行